［第８分科会：環日本海交流におけるメディアの役割］

海を越えたキャッチボール
―日ロ少年野球にみる草の根交流の今後―

森　本　茂　樹（福井放送）

はじめに

その出会いは、まさに偶然に訪れた。1990年秋、ペレストロイカの風が吹き荒れる中、旧ソビエト・ウラジオストクで出会った少年・青年たちの姿は、我々スタッフの心を大きく揺さぶった。荒れたサッカーグラウンド、傷だらけのボールを素手でキャッチボール、ユニフォームや道具もそろわず、ただただ白球を懸命に追いかけている。指導者の一人がポツリと漏らす「野球はオリンピックを目指して本格的に始まったが、用具や球場や金は、ほとんどありません」。かつて、国を揚げてオリンッピク競技に力を注ぎ、世界を震え上がらせたソビエト連邦の勢いは微塵も感じられない。その指導者の横で、ただただ、無邪気に白球を追いかける少年たちの屈託のない笑顔だけが深く心に響いた。

当時ゴルバチョフ政権の改革路線は、多くの市民に混乱と動揺を招いていた。ソビエト連邦崩壊寸前の経済状況下で、配給も滞りがちになり、食料品店前には長い行列が出来るなど、市民は大きな不安を抱えていた。さらに日本のマスコミも「ロシア国内の大混乱で、市民は冬を越せるか」といった論調で、連日、政治・経済混乱を中心に、ロシアの国内情勢を刻々と伝えていた。しかし現地に立って、悩み考えた。我々ローカル局が、今伝えるべきものは何か……。今、目の前に広がる「変化」はまさに「チャンス」ではないか。それもお互いを深く知って「交流」に結びける「絶好の機会」に繋がらないか。そこで、一つの小さな決断をする。

「ぼろぼろの白球を懸命に追いかけるロシアの少年たちを日本中に紹介しよう！」

１．福井・ロシア少年野球交流の今後の課題と見通し

福井市野球連盟とナホトカ市野球連盟（ナホトカ市少年野球学校）が、日ロの草の根交流の窓口となって現在も定期的な交流に発展している。もちろん「言葉」という大きな壁があるにも関らず「野球」以外にも両国少年同士のホームステイや文通など「個」と「個」の深い絆を生みだしている。さらに暗い影を落とした「重油事故」は、少年たちにとって、日本とロシアが海を挟んだ「隣国」であるという意識を深く根付かせるきっかけにも繋がった。

一方で、今後の交流に向けた様々な課題が浮上している。両国の相互訪問による親善少年野球大会は多額の資金が必要になっており、両国野球関係者のスポンサー探しなどは年々厳しさを増している。基本的に開催国の受け入れ側が、滞在費用を全額負担し、訪問チーム側が往復の旅費を負担することになっている。

しかし近年ロシア側は、一部企業を除いて、援助する余裕のある企業が減少しているという。99年夏のロシアチーム来日に際しては、往復旅費などで、少なくとも１万ドルが必要だったが、沿海地方のわずか10社のスポンサーから日本円で、１社あたり５千円～20万円の寄付を集めるのがやっとだったという。このため来日少年のメンバーも当初予定の30人から20人に減らし、各家庭に対してもできる範囲で負担をお願いして、なんとか来日が実現したという。給与や年金不払いなどによって、ロシア国内の多くの一般家庭では　経済的に相当厳しい状況が続いている。こうした中、比較的裕福な家庭の少年だけしか交流に参加できないという状況だけは何とか避けてもらいたいと考えているのだが。

一方、日本側で受け入れる福井市野球連盟でも、1年をかけて地元企業のスポンサー探しなどを行っているが、毎年の援助要請や、不況のあおりをまともに受け、やはり苦戦している。両国の野球連盟ともに地元自治体などからの援助も受けているが、交流を続けるための長期的なビジョンに立った新たな資金確保は緊急の大きな課題となっている。

「継続は力」という名言がある。長年の少年野球交流は、特にロシア少年たちに大きな夢を与えている。巨人軍OBの故青田昇氏や中畑清氏の情熱的な指導によって、将来、日本のプロ野球界を夢見るロシア少年たちが増えている。まだまだ指導者や用具不足などで、野球環境は決して恵まれではいないが、ロシア少年たちのハングリー精神と向上心、さらに強靭な体力をみると、近い将来、あのスタルヒンのように日本のプロ野球界にロシア選手がデビューする日が必ずくることを確信させてくれる。さらにこれまでの日本からの援助に頼っていた「ロシア野球の発展」も日本からの技術協力などによって、バットや野球場などを自らの手で作ろうという動きが見られるようになった。まだまだ時間はかかるだろうが「ロシア野球の自立」に向けた人的・技術的な協力による「側面的なサポート」が今後とも末長く重要になっていくことだろう。

ところで、これまでは、福井と沿海地方のナホトカ・ウラジオストク・ウスリースクなど、ごく限られた地域の野球少年との交流が中心だった。これについて、福井市野球連盟の幹部は、「これまでの日ロ草の根交流を基礎に、さらに日本海沿岸諸国に参加を呼びかけて、21世紀はじめに、福井市で＜環日本海大会＞を目指したい」と話している。

福井放送では1990年、ロシア少年への「中古野球用具の呼びかけ」をはじめとして、全国放送「ズームイン朝！」や福井県内のローカルニュース、特別番組などを通して「海を越えたキャッチボール」の模様を毎年放送している。特にロシア国内での交流の様子は、福井放送だけでなく、ロシア・ナホトカ市内のケーブルテレビ局や新聞社などが積極的に報道しており、沿海地方の野球熱を盛りあげる大きな一因につながっている。今後はこうしたロシアのマスコミなどともさらに協力しながら、単に「交流の紹介」に終わらせるだけでなく、両国・両地域の相互理解をさらに進める厚みのある取材・報道が必要になっている。

北東アジアの平和が世界的な課題になっている中で、日本海沿岸の各報道機関は政治的・経済的な「国」と「国」の関係を冷静かつ客観的に伝えるだけでなく、今後、地域の平和と相互理解を深めるための様々な提案・行動型メデイアへと脱却する必要があるといえるだろう。近い将来、放送業界は、地上波デジタル時代を迎え、ますますローカル局の存在意義が問われる。こうした大きな変革の時代に、福井のローカルメデイアは、東京や日本国内だけではなく、日本海沿岸諸国に向けた開かれた情報拠点として、ますますその責務は大きくなっている。

ナホトカ号重油流出事故対策のメディア報道の分析

敷　田　麻　美（金沢工業大学）

1．はじめに

1997年1月に起こったロシア船籍のタンカー「ナホトカ号」による重油流出事故は、日本海沿岸の沿岸域環境に影響を与え、その結果、漁業や海浜レクレーション、観光にも被害が及んだ。海上保安庁や自治体などが、漂流予測や漂着重油の回収などの対策を講じたが、影響が広域に及んだことや不慣れ・準備不足から完全ではなく、回収の遅れや情報流通の不十分さをメディアや関係者から指摘された1）。また、石川県だけでも延べ9万7千人（地域住民を含まない）が、ボランティアとして漂着重油の回収に参加した2）。多